
夢のうつつ 海に見える町

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のうつつ 海に見える町

【Nコード】

N8796B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

ゆめのうつつ。夢みたいな現実の出来事。僕らは今日から・・・

「ゆかりー。おーい、起きてるー?。」

「∴。あ、修ちゃん! ごめんね、まだ着替えてないの」

「なんだー、僕、超急いで来てやったのに。五時半って言ったのゆかりだろう」

「うん。なんかね、キンチョーして眠れなかった。だから、後ちよつと待ってね」

「緊張って、引っ越すのは僕のほうなのに」

「いいの! じゃあ、カーテン閉めるね? 覗いたら承知しないよ」

「ばーか」

「どれにしょー∴」

「何でもいいから早くー」

「待ってってば、今着てるから」

「んんー∴」

「∴修ちゃんさ、黒と白どっち好き?。」

「∴灰色」

「言うと思った！ でも、どっちかと言ったら？」

「じゃあ、白がいいな」

「じゃあ、これでよしと」

「まあ、Tシャツなんてそんな気にしないけどね」

「だめだよ。最後の日なんだからお気に入りのカッコで行きたいの。
…これ持ってた？」

「なにこれ？」

「サンダルだよ。可愛いでしょ？ 昨日の夜、こっそり部屋に持ってきてたんだ」

「別に玄関から出ればいいんじゃない？」

「うーん。それはさ、ほら、お母さんたち起こしちゃうじゃん」

「ゆかり、窓からこっそり逃げ出してみたいだけでしょ？」

「えへへ、なんでわかったの？」

「だって、さっき新聞取りに来るお母さん見たもん」

「え、ほんと？」

「うそ。ほんとはただの当てずっぽうだよ。…そんなことより気を

つけてね、けっこう窓の位置高い……ってうわ!」

「あ、ごめん。大丈夫?」

「ゆかりは?」

「おかげで平気」

「じゃ、僕も。もう、そのままはだしで行くかあ?」

「ええ! ひどい、それ返してよー」

「ほい」

「あ、もー! 乱暴に扱わないでよね」

「シンデレラじゃないんだから。ただのサンダルじゃん?」

「修ちゃん可愛いこというね」

「……ま、ほら、早く行かなきゃ太陽昇っちゃうぞ?」

「うん。わかってるよ。ちよつとうまく穿けなくて…」

「もうヒモしなくていいよー」

「ヒモじゃないよ。ストラップだよ、ストラップ」

「どっちでもいいって。ほら、先行くよ?」

「あ、待ってよ。…よし、穿けた！ 修ちゃん、早いよ」

「もう。日の出まであと十二分だってさ」

「じゃ、近道しよう」

「タバコ屋の路地？」

「ううん、今野さん家の庭」

「人の敷地じゃん」

「大丈夫。今日くらい」

「そーいうものかあ？」

「いいの、いいの。ほら、行こう？」

「急に元気になったね、ゆかり」

「そうかな？ だけどどう？ 今日のあたし可愛い？」

「わかんないよ」

「あ、もしかして、恥ずかしがってる？」

「いや、別に―…」

「久しぶりだもんね。こんなこと聞くの」

「うん」

「昔は即答で世界一可愛いって言ってくれたんだよ？」

「十年くらい前の話ね」

「ま、幼稚園児だったもんね、あたしたち」

「そうそう」

「でも、可愛い？」

「でもってなにさ」

「…わかんない。後、何分？」

「十分ちようど。…ほんとにここ入るの？」

「だって、ここ通れば絶対に間に合うよ」

「まあな。じゃあ、おじゃましまーす…」

「おじゃまします…。早く行こう、あそこから出られるから」

「おう。…ほら、行こう」

「うん。…って、あっ…やばい！ 犬起きちゃった！」

「まじで！ じゃあ…走ろう！」

「わぁっ、吠えた！」

「ああ、そっか、ゆかり犬苦手なんだね」

「うん。ほら、早く早く！」

「わかってるって。ほら、こっちこい」

「ありがとう」

「よし、やっと出口だ」

「ああ、びっくりしたー」

「大丈夫？」

「どきどきした」

「ゆかり、弱いね」

「犬だけはちょっと、ね」

「女の子なんだ」

「そーだよ」

「でも、ほら、おかげで海岸に着いたよ」

「ほんとだ。なんだかすっごい静かだね」

「それに潮のいい匂いがする」

「ねえ、もっと近づいてみようよ」

「そうだね」

「あ、貝殻」

「昔さ、よく拾ったよね」

「んー。そーだねー」

「そんなに夢中に拾って、どうするの？」

「修ちゃんのポケットに、こうするの」

「え？」

「だってさ、引越すところは海ないでしょ？　ほんとに波を捕まえないところだけど、それはできないから、ごめんね」

「ゆかりが謝ることじゃないでしょ」

「ううん。あたしって、なにもできないから」

「急になに言ってるの！　すごい嬉しいよ、これでこの海を忘れないでいられる」

「修ちゃんは優しいね」

「そーかな…」

「むこうに言ってもきつと素敵な友だちができるよ」

「だいいいな。でもさ、僕は絶対忘れないよ」

「え？」

「海じゃなくて、…ゆかりのこと。僕が生まれてから中学卒業までの十五年間、ずっと傍らにいた大切なゆかりのこと」

「たまには電話してね？ 手紙も書いてね？」

「当たり前じゃんか」

「…修ちゃんも、泣いてるの？」

「波が、はねた」

「ふふ、そっか、男の子だもんね」

「…当たり前だろお」

「あ、見てよ、修ちゃん！ 朝日がすごい綺麗だよ」

「ほんとだ。まぶしー」

「わあああ、早起きして、よかった」

「ほんとによかった？」

「うん」

「じゃあ、笑ってよ、ゆかり」

「…うん」

「ははは、世界一可愛い。…なーんてね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8796b/>

夢のうつつ 海に見える町

2010年12月1日06時31分発行